

武雄市図書館に行きました (IV)

公共図書館はファッションではない！武雄市図書館 見学記

2013年8月〇日 (〇)

〇〇〇〇 (〇〇〇〇民)

武雄市図書館概要

2000年10月 武雄市図書館・歴史資料館開館 設計は佐藤総合計画
2012年1月 樋渡啓祐武雄市長が増田宗昭 CCC 社長に図書館の委託を打診
2012年5月 代官山蔦屋書店で、CCC を指定管理者とする武雄市図書館プロジェクトを記者発表
2012年8月～11月 佐藤総合計画と図書館改修実施設計契約
2012年4月 改修後 CCC による運営委託開館
基本設計 スタジオキャリア+CCC
建築面積 3,352.04㎡ 延床面積 3,803.12㎡
参照：『新建築』2013年7月号 図面と写真

CCC (カルチュア・コンビニエンス・クラブ) の運営コンセプト

BOOK&CAFÉ 本とカフェが融合した空間で本を読みながら、お茶を楽しめる。
開館時間の延長 9:00～21:00 年中無休
改装により、開架冊数 20 万冊 (書庫は閲覧室へ)
雑誌や新刊書、レンタル CD&DVD を買えたり、借りたりできる
iPad による図書の検索やセルフレジ
図書館の貸出ごとに T ポイントがたまる

<これは図書館とは言えない。カフェ&蔦屋書店である>

8月2日夏休みの平日、午後0時30分から午後4時40分に訪問した。2000年に佐藤総合計画が計画した美しい建物だ。御船山と武雄神社を背景とした武雄の歴史と文化を感じさせるアプローチだ。駐車場は満車状態。

人口5万人の街にもいい書店とおしゃれなカフェが欲しい。しかし、民間企業の書店が市図書館と名乗るは詐欺行為だ。図書館はどこに行ったのか？書店の奥に図書館が遠慮がちにおしこめられている。

入口を入るとすぐに『たけお散歩ー武雄市図書館公式ガイドブック』(500円)、樋渡市長の登場する『図書館が街を創るー「武雄市図書館」という挑戦』(ネコ・パブリッシング 1,500円)そして『文化の樹を植える。「函館蔦屋書店」という冒険』(ネコ・パブリッシング 1,500円)の平積みが迎えてくれる。もちろん販売品だ。マガジンストリートには600誌の

雑誌と販売用新刊書の平台が続く。入口近くのスターボックスのカウンター、ここは以前子どものためお話し室（武雄のシンボル巨樹をイメージした素敵な空間だった）と子ども用トイレ（水回りが敷設されていたのでスタバの厨房となった）のあったところだ。102席のカフェがテラスへと広がる。都会風なおしゃれな空間だ。どちらを向いても電子掲示板があり、蔦屋の宣伝やTポイントカードの案内が目飛び込んでくる。

館内は撮影禁止のシールがやたらと張ってある。写真が欲しい視察者は紹介本を買えということかな。

<書店と図書館の融合？書店に乗っ取られた図書館>

書店と図書館は競争相手ではなく今までも共存してきた。これからもそれぞれの役割を持つ良き競争であることはできる。しかし、樋渡市長が市議会の同意もなし、市民も知られない中、東京で突然指定を発表した民間企業への運営委託だ。税金の投入を受けて、図書館と名乗るはどうか考えてもおかしい。正面入り口から一番いい場所を書店が占めて、販売品の書架には白い見出し板、図書館の貸出用は黒い見出し板で、区別しなければならない。書店なので、雑誌も本も見るのは無料。しかし、売り物の雑誌や本を長時間独占するのは気が引ける人も多い。結局なにか買うことになるようだ。図書館用の雑誌はほとんどなく、雑誌のバックナンバーを提供することははじめから考慮されていない。子どもはもちろん販売品と貸出用を区別は難しい。販売用を手ばなさない子どもに母親が「ここじゃなくて、借りられる図書館にこうね！」と言いつけて聞かせている。

びっくりしたのは、児童書のコーナーの目の前に販売用の夏休みの課題図書がずらりと平積みになっている。図書館の蔵書は2冊。予約が待てない場合は買うことになる。本や雑誌の購入も図書館の貸出もTポイントカードを使いセルフ・レジです。

『永遠のゼロ』は販売用文庫本が山積みになっているので、スタバでじっくり読み込んでいる人もいる。（速読でも3時間はかかるだろう）これは自由である。図書館所蔵は1冊で予約が14件。『海賊と呼ばれた男』図書館用が2冊で予約が11件。販売用はもちろん目立つところにある。

そもそも図書館貸出用に新刊書を豊富に提供することは書店としては営業上無理がある。ちなみに図書館の新刊棚には4月発行の本がずらりと並んでいる。

<誰もが使いやすい図書館は破壊された>

マガジンストリート書店部門はきらびやかな照明も新設し（床を全部張り替えて床下に配線をした）魅力的に見える。

リニューアルデザインのコンセプト「書物の呼び声がこだまする壮麗な空間」は見た目の装飾として写真うつりはきれいだ。奥においやられた図書館の書架はやたらと高い（8段）四方が囲まれた書架が3箇所。もちろん上段7段8段は手が届かないので、ダミーのブックケースが置かれている。以前は見通しの良い書架の高さだった。装飾として並べられている

だけの2階書架も上段8段以上あり、危険な梯子を使ってしか手は届かない。「図書館員に声をかけてください。」と張り紙がしてあるが、図書館員は忙しそう、なかなか声がかからない。

一番奥に追いやられた児童コーナー（以前は入口近くにあった）は明るい窓際がお話しのコーナーとなって、なんとも落ち着けない。驚いたことに児童書コーナーのガラス窓をふさぎ、高い壁面書架にしたので、子どもは手が届かない。その夜に食事をした武雄の店では「息子は図書館が好きでよく行っていたんですが、今度の図書館に行ってみたら、いつも読んでいる本が高いところに並んでいて、自分で取れないと怒っていました。」と聞いた。

<使いにくい検索機>

多くの公共図書館では利用者用検索パソコンは進化して使いやすくなっている。武雄市図書館の検索機はおしゃれなiPadだ。図書館資料の検索機ではなく、蔦屋書店の購入とAVレンタル用に作られたもので、“ついでに図書館の本も検索できるよ”と追加機能となっているので、なんとも使いにくい。資料検索しようとする壁かけ式のiPadを使うのだが、これほど使いにくいとはおもわなかった。すぐに首が痛くなって、検索する意欲を減退させる。それがいやなら、1時間限定で貸してくれるiPadを借りることになる。苦勞をして、検索して「在庫」の表示がある本を探すのがまた難しい。ICタグが貼付されているのでiPadで地図が表示されるのだが、これがまた、あてにならない。

<図書分類と排架—書店独自の分類は使いやすいか？>

書店は新刊書を売るフロー情報なので書店分類はそれに適している。図書館は整理・保存・提供することで数十万冊以上のストックの分類に適している。書店分類を20万冊の蔵書管理に適応することは無理である。

リニューアル以前の図書館の本はNDC（日本十進分類—日本の図書館で広くつかわれている）のラベルがついている。リニューアル後はNDCを採用せずに蔦屋書店ノウハウ（民間業者のノウハウはすべて解決すると宣伝されている）の22分類になっているらしい。いくつかの資料を苦勞して検索をして、図書の所在を確認に何度か書架を往復したが、所定の場所に見あたらないものがしばしばあった。そもそも分類システムに無理があり、これでは図書館の作業員が所定の場所に返却することが難しいと思われる。

以前からある図書館蔵書はNDCのラベルが貼ってあるが、それは一応の目安としながら？裏表皮に添付されている小さなシールの表記“社会—社会福祉—災害”で排架しているらしい。これでは効率的な返却作業にはほど遠い。図書館員にも聞いて助けてもらったが、どうも理解できない分類だ。

館内の配置図もマガジンストリートだけは派手だが、図書館部門の配置は大変不十分で、「料理」「旅行」「人文」などときわめて大まかなので、行き当たりばったりでカンを頼りに、幸運な出会いを期待するしかない。

2階の参考書の配置もずさんなので、図書館の大切な役割である調査研究のための資料は望むべくもない。

<武雄の歴史を次世代へ引き継ぐ歴史はどこへ>

リニューアル前の武雄市図書館には歴史資料館の「蘭学館」が存在していました。近世史に輝く武雄蘭学はこの地で生まれ、市民の誇りであったはずである。その地域の歴史と文化を保存・発信する図書館と歴史資料館の役割がはたされていました。指定管理の範囲に入っていなかった、美しい「蘭学館」が開館してみると、まるごと、無残にも蔦屋のDVD・CDレンタルショップになっていました。図書館部門の郷土資料も調査には使えない配列に（ぐちゃぐちゃ）なっています。

<9時から21時開館、年中無休の意味>

コンシェルジェ（図書館員）は忙しい。あなたの街の図書館が365日開館していることを望みますか。そこで働く人はどんな勤務条件で働いているのでしょうか？あなたの家族なら使い捨てのような条件で低い時給働き続けることができるのでしょうか。図書館で働く喜び、利用者にサービスする誇りを持ち続けることができるのでしょうか。

マスコミではでに発信される素晴らしい図書館の実像には、驚きとともに恐ろしさを感じた見学であった。